



Vol. 55に寄せて

9月に入りましたが、日中は日差しも強くまだまだ暑い日が続いています。それでも朝夕は暑さも和らぎ少しずつ秋を感じるようになってきました。さて、9月はお月見というイメージがありますが、今年の十五夜は10月6日とのことです。十五夜の月のことを中秋の名月と呼びますが、必ず満月ではなく、今年は翌日の7日が満月とのことです。10月になるとかなり涼しくなっていると思います。ぜひ、ススキや団子をお供えて、月を愛でてみてください。



9月に見頃を迎える植物：チョウセンゴミシ（マツブサ科）

和名：チョウセンゴミシ
学名：Schisandra chinensis Baillon
薬用部：果実
生薬名：五味子（ゴミシ）
用途：鎮咳・去痰、強壯
栽培場所：植物園冷室
開花時期：7月



チョウセンゴミシについて

北海道、本州の北部・中部の山地、朝鮮半島、中国、アムール、樺太など、涼しい地域や山地に自生するつる性の落葉性木本植物である。葉は互生、葉身は薄く、卵形、広倒卵形ないし広楕円形で、長さ5~11 cm、葉先は尖り、辺縁に小鋸歯がある。雌雄異株または雌雄異花で同株とされる。花期は6~7月、淡黄白色で径が約1.5 cm、芳香のある釣鐘形の花が葉腋に下垂してつく。雄花の花被は6~9枚で、雄しべは5個あり基部で合着する。雌花の花被も6~9枚で、雌しべは多数あり花托にらせん状に配列する。果期は8~9月、径5~7 mmの球形の液果（えきか：水分の多い柔らかい果肉を持つ果実）が深紅色に成熟し、内部に種子1~2個を含む。果実は成長するにつれて花托が伸びてブドウの房のように垂れ下がる。1つの房は1つの花に由来する。

五味子について

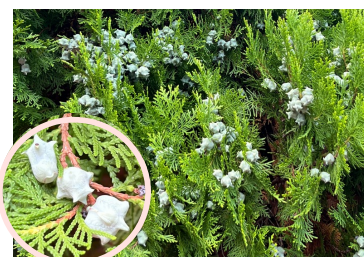
日本薬局方収載の生薬で、神農本草経では上品に収載される。秋に成熟果実を房ごと採集して日干しし、乾燥したら手で揉み果実だけにして調製する。生薬は弱い匂いがあり、味は酸味があり、後に渋くて苦い。乾燥して貯蔵中に暗黒色になり、表面には白色の粉が付着するが、これは有機酸の結晶が析出したもので品質が良いことを意味している。精油やリグナン類を含み、一般漢方294処方中、小青竜湯、清肺湯、人參養榮湯など16処方に、鎮咳・去痰、強壯を目的に配合される。



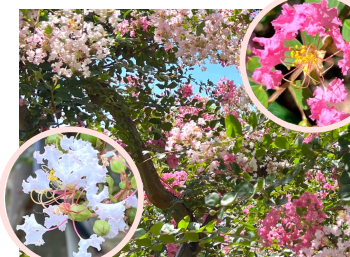
五味子（ゴミシ）

9月に見頃を迎えるその他の植物

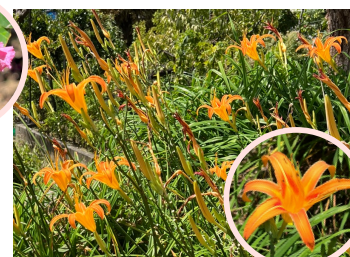
<科名はAPG分類体系による>



コノテガシワ（ヒノキ科）
生薬名：柏子仁（ハクシジン）
薬用部：種子
効能：滋養・強壯



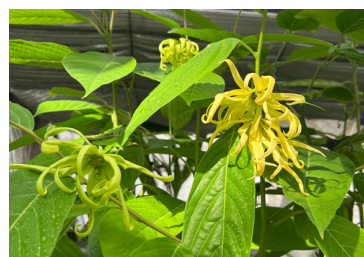
サルズベリ（ミソハギ科）
サルが滑り落ちそうなスベスベの樹の肌が特徴。花期が100日ほどあり、百日紅の別名を持つ。



アキノフスレグサ（ツルボラン科）
沖縄ではクワンソウと呼ばれ、蕾や葉、根が食材として利用され、睡眠改善効果があるとされる。



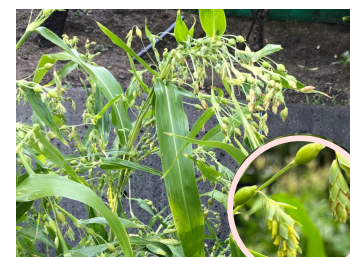
オオバギボウシ（キジカクシ科）
若葉を山菜として利用するが、有毒のスズラン、バイケイソウと間違えやすく注意が必要。



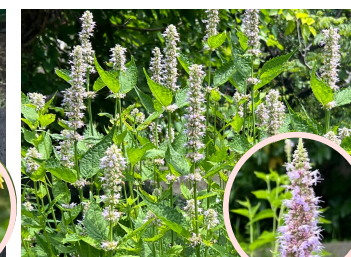
イランイランノキ（バンレイシ科）
リボン状の花びらをもつ花から取れるアロマオイルは、香水などの原料として利用される。



ケショウセンアサガオ（ナス科）
生薬名：ダツラ
薬用部：葉
効能：鎮痛・鎮痙、鎮咳 など



ハトムギ（イネ科）
生薬名：意苡仁（ヨクイニン）
薬用部：種皮を除いた種子
効能：利尿、消炎、イボ取り



カワミドリ（シソ科）
生薬名：土藿香（ドカッコウ）
薬用部：地上部
効能：解熱、鎮痛、健胃

五味子の成分とその活性

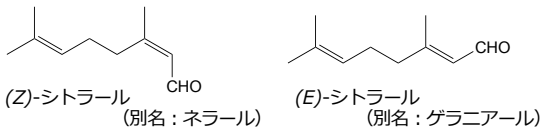
五味子は精油を多く含み、その主成分はモノテルペン類のシトラールで、他にセスキテルペン類の α -、 β -カミグレン、(+)-イランゲンなどが含まれる。また、リグナン類としてジベンゾシクロオクタジエン型のシザンドリン、ゴミシンA-Hなどが報告されている。このタイプのリグナンはピフェニルの部分で軸不斉を持ち、軸性キラル化合物としてR/S表示法により絶対配置を決定することができる。図では、ゴミシンAとCを例にして、絶対配置の決め方を紹介する。他に、五味子はクエン酸、リンゴ酸などの有機酸を多く含み、口にするとかなり酸っぱい味がする。含有成分の活性としては、シザンドリンやゴミシンAには、中枢抑制またはトランキライザー様作用、ストレス潰瘍予防作用が報告されているほか、シザンドリンには鎮痛、利胆作用が、ゴミシンAには鎮咳、抗炎症、抗アレルギー、利尿作用が報告されている。また、リグナン類には、肝細胞障害抑制、肝繊維化抑制、肝再生促進作用なども報告されている。

精油：揮発性の低分子化合物

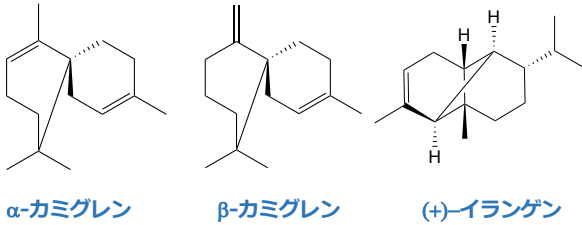
モノテルペン：炭素数10個の化合物

シトラール

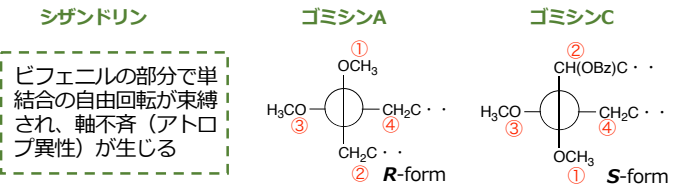
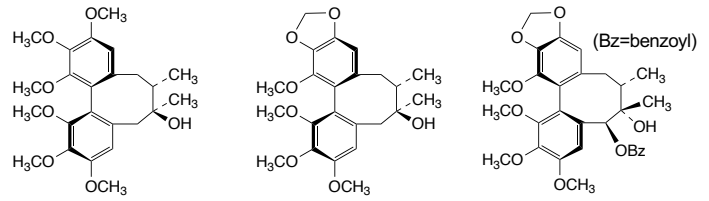
幾何異性体2種（E体とZ体）の混合物



セスキテルペン：炭素数15個の化合物



リグナン：フェニルプロパノイド（C₆-C₃化合物）の2量体



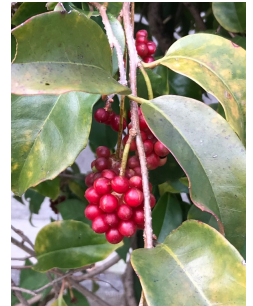
<ピフェニルの立体化学の表記法>



植物園のマツバサ科植物

植物園では、マツバサ科植物のサネカズラ (*Kadsura japonica*) を2号園で栽培している。日本では、サネカズラの果実を南五味子として、同様の効能を期待し五味子の代用品としても利用されていた。

サネカズラは本州の関東以西から沖縄、台湾、中国に分布し、温暖な山地に生え、生垣などにも利用される常緑のつる性木本植物である。葉は互生し、葉身は楕円形で光沢がある。雌雄異株または同株とされ、花期は7~8月で葉腋に淡黄白色の花が下垂する。果実は液果で、球状の花托について丸い房を作り紅熟する。ブドウ状の房を作るチョウセンゴミシと房の形が異なる。また、茎を細かく刻み、水に浸しておくと粘質の液になる。このネバナバとなった液を鬢付け（びんつけ）油の代用品、養毛剤、洗髪などに用いていたと記録があり、武士の髪型を整えて「美男」になるという意味でビナンカズラの別名がある。鬢付け油は、古くから日本髪を作る際や力士の髷を結うために使われ、一般に木蠟や菜種油などに香料を混ぜて作られる。



サネカズラ

MEMO：名前の由来

チョウセンゴミシという和名から、朝鮮から渡来し日本に帰化した植物のように思えるが、日本には初めから自生していた植物である。当初、生薬として果実を朝鮮半島から輸入していたものの、その元の植物が何かわからなかった。しかし、後に本草学者で発明家である平賀源内により駿河の国に分布・生育している植物と同じであることが判明した。その後、この植物をチョウセンゴミシと呼ぶようになったとのことである。五味子の名前の由来は、生薬を食べると甘味、酸味、辛味、苦味、鹹味（塩辛い味）の5つの味がすることに由来していると言われている。実際には、酸味が強く、局方では「酸味があり、後で渋くて苦い」と記載されている。果実の皮と果肉は甘酸っぱく、核は辛くて苦く、全体に塩辛い味がするとの記載がある。

五味について

生薬には味があり、酸味、苦味、甘味、辛味、鹹味（塩辛い味）に分類されます。これらの味は、その生薬の薬効と密接に関係し、下記のような作用を持つとされています。（ ）内は該当する生薬。

- 酸味：収斂、止血、止瀉（五味子、山茱萸、酸棗仁）
- 苦味：清熱、瀉下、鎮静（黄連、黄芩、山梔子、大黄）
- 甘味：緩和、強壯、補気（甘草、膠飴、大棗、人參）
- 辛味：発汗、解表、理気（桂枝、細辛、生姜、麻黄）
- 鹹味：軟堅、瀉下（芒硝、牡蛎）

普段、食べる食材の味も同様に考えることができ、五味のバランスを整えて食事を摂ることが大切だと言われています。



編集後記

古代中国の思想である五行説では、全ての万物を「木・火・土・金・水」の5つの基本的属性で捉え、これに人体の生命活動なども当てはめています。秋は、五行説では「金」に属し、臓器では「肺」が当てはまります。この季節は空気が乾燥しやすく呼吸器系の影響を受けやすいと言われ、辛味のある食材が体調を良くすると考えられています。

神戸薬科大学 薬用植物園
園長 土反伸和（医薬細胞生物学研究室 教授）
西山由美（文責）、平野亜津沙、大井隆博
E-mail : nisiyama@kobepharm-u.ac.jp
総合教育研究センター支援部門 竹仲由希子

